

行政視察報告

(文教福祉委員会)

<視察目的>

- ①藤枝市は健康・予防日本一の取り組みを市民・事業者・行政が一体となって推進されている。「守る健康」「創る健康」で元気なまち” ふじえだ” となるよう様々な工夫を凝らしたプロジェクトを立ち上げ、市民の皆さまと共に健康づくりを推進されている。安来市においての健康づくりの参考になるとの思いから藤枝市に訪問させていただいた。
- ②平成 28 年 10 月に「島根県地域医療構想」が策定されそれを受け今年の 3 月、安来市立病院新改革プランが策定された。このプランに基づき安来市立病院も公立病院としての役割を果たすと共に経営改革と収支改善に取り組んでいくこととなった。しかし、経営環境や医療提供体制の維持が極めて厳しい状況になっている。そこで、今、厳しい状況を改善されてきた公立病院の現状を学ぶことは重要な事との思いから、新病院建設以降経営も安定し、病院改革に取り組んでこられた常滑市民病院を訪問させていただいた。
- ③8 月竣工式を迎える安来市総合文化ホール「アルテピア」の今後の指定管理での運営はどのようになっていくのか？他の自治体の状況を学ぶことは重要であると思っている。そこで以前から可児市の文化創造センター・アーラの衛館長の手腕がすごいとお聞きしていたので、ぜひとも話を伺いたいと思い訪問させていただいた。

<視察概要一覧>

視察月日	視察先	視察施設	視察内容
7 月 3 日	静岡県藤枝市	藤枝市役所	健康マイレージをはじめとした『”健康・予防日本一” ふじえだプロジェクト』の取り組みについて 健（検）診受診率向上の取り組みについて
7 月 4 日	愛知県常滑市	常滑市民病院	市民病院建設事業について
7 月 5 日	岐阜県可児市	可児市文化創造センターala	文化創造センターala の運営について

<視察概要報告>

1. 静岡県藤枝市

- 対応者：（議会）藤枝市議会 西原 明美議長
（執行部）健康福祉部 健康企画課 健康企画担当係長
（議会事務局）

●場 所：藤枝市役所第 1 委員会室

●市 勢

＊市制施行 昭和 29 年 3 月 31 日

＊人 口 (男) 71,665 人 (女) 74,684 人 合計 146,349 人 (H29.5.31)

＊世 帯 数 58,387 世帯

＊面 積 194.03 km²

＊産業分類就業者比率

【第 1 次産業】 4.2% 【第 2 次産業】 32.8%

【第 3 次産業、他】 63.0%

●特 徴：藤枝市は、静岡市から西へ約 20 キロメートル、静岡県のほぼ中央に位置している。東西 16 キロメートル、南北 22 キロメートルに広がり、面積は約 194 平方キロメートル。南北に長く、北部は赤石山系の南端に接し豊かな緑に恵まれている。山間部から流れる瀬戸川に沿って広がる志太平野に市街地が形成されている。豊かな自然に恵まれた、歴史と文化の香りあふれるまちである。

古くから東海道の宿場町としてにぎわい、現在も東京と名古屋の中間に位置する交通の要衝となっている。市の中央には清流“瀬戸川”が流れ、3 月の終わり頃には兩岸約 2 キロメートルに渡る見事な桜トンネルが続く。

また、市のほぼ中央には「花・水・鳥」をテーマとした総面積 28.8ha の蓮華寺池公園があり、四季を通じて、多くの市民や来訪者で賑わう。春には、約 1,300 本の桜や、20 種類以上約 250 本の藤の花が訪れる人を迎える。この他にもハスやシャクナゲなど一年を通して美しい花が咲き誇る。北部は、豊かな自然に囲まれたエリアになっていて、市の中心部から車で 20～30 分程度走るだけで、「田舎暮らし」を楽しむことができる。昭和 29 年 3 月に市制を施行し、平成 21 年 1 月 1 日に、隣接する岡部町と合併。人口 14 万 6 千人余の静岡県の中核都市として発展している。

●議会の状況

＊議員定数 (条例定数：22 人、現員数：22 人)

＊会派構成：藤新会 (13 人)、市民クラブ (3 人)、日本共産党 (2 人)、
公明党 (2 人)、60 社中 (2 人)

＊当選回数：1 回～5 回

＊会議の開催状況

- ・定例会：(3・6・9・12 月) →本会議日数：20 日／年 (H27 年度実績)
- ・臨時会：1 日／年 (H27 年度実績)
- ・常任委員会：26 日／年 (H27 年度実績)
- ・特別委員会：39 日／年 (H27 年度実績)

*議決結果：122 件（H27 年度実績）

*常任委員会

総務文教委員会（8 人）、健康福祉委員会（7 人）、建設経済環境委員会（7 人）

*特別委員会

予算特別委員会（11 人）、決算特別委員会（11 人）、議会改革特別委員会（7 人）、市議会広報公聴委員会（7 人）

*事務局職員数：事務局長以下 8 人（定数 9 人）

●概 要：（資料別紙）

①健康マイレージをはじめとした『“健康・予防日本一” ふじえだプロジェクト』の取り組みについて

・藤枝市の重点戦略…「暮らしの基本」4 K政策 健康・教育・環境・危機管理
市民が、幸せな健康生活を少しでも長く続けられるまちを目指す。

・“健康・予防日本一” ふじえだ推進体制

市民・事業者・行政が一体となって推進する。

「守る健康」…命を守る。発症予防、重症化予防、地域保健・医療

地域から 1,000 人の保健委員を選出

「創る健康」…命を輝かせる。豊かなライフスタイル、健康寿命の延伸、
ポピュレーションアプローチ

・“健康・予防日本一” ふじえだプロジェクト

プロジェクト1 歩いて健康「日本全国バーチャルの旅」

プロジェクト2 ふじえだ健康スポット20選

プロジェクト3 ふじえだ健康マイレージ

→世代に応じたアプローチとツールにより、

『個人で楽しむ健康』『みんなで楽しむ健康』

今後は、企業を巻き込み経済活動と連動した展開を図る。

②健（検）診受診率向上の取り組みについて



●質疑

Q. プロジェクトの、H29 年度の大まかな予算額はいくらか。

A. 「日本全国バーチャルの旅」に関しては印刷製本費が約 30 万円、「健康スポット 20 選」は印刷製本費とイベント開催の費用とで約 120 万円、「健康マイレージ」は印刷製本費等で約 100 万円、WEB 版の費用として開発業者に使用料として年間 60 万円。あとは職員の人件費と、健康づくり推進協議会の謝礼等。

Q. 市の総合計画との関連性はどうか。大変なボリュームのある事業だが、職員は何名か。

A. 一つの柱という位置付け。総合計画があり、そのうちの一つである健康福祉分野での柱ということ。

職員は主に健康企画課 4 名と健康推進課が臨時職員を含めて 40 名。

Q. この事業を始めて、例えば国保で一人あたりの医療費が削減できたというようなデータはあるか。

A. 医療費が下がっている傾向はある。しかし被保険者数の減などの要因もあるため、この事業による効果と断定はできない。こういった形でエビデンスを得られるか、難しいところだと感じている。今後は例えば企業に入り、ツールを使っていたき医療費の動向を見ていく、なども考えているところ。

Q. 健康アプリ「あるくら」を開発されたということだが、ダウンロード数など、使用者の把握はしているか。また各人が手元でデータを見られるようになっているかと思うが、それを利用されることも考えているのか。

A. H28 年 10 月に始めてから、1,000 件ほどダウンロードされている。これからどのように増やしていくのが課題。

開発会社がデータを集約していくことになるが、どう活用していくか検討中。

Q. 保健委員の報酬は。

A. 地域の健康づくり活動活性化事業費補助金というものがあり、保健委員連絡協議会の 12 支部に、合計で約 100 万円支払いしている。使い方は支部に任せている。保健委員のモチベーションをどう高めていくかが課題である。

Q. お茶と健康との関連について、政策に生かす等の考えは市としてはあるのか。

A. 現状ではない。ただ名産として大事なものとは考えており、お茶のまち推進課という課もある。いかに普及させ次世代につないでいくかということを、連携してやっていってもいいのではという考えはある。

Q. がん検診の受診率が高いこととの関連は。

A. 健康推進課にてきめ細かい施策を行なっている。例えばがん検診を特定健診とセットでできるようにしている、集団検診の際に地区ごとにバスやタクシー送迎を行なう、どこの地区でも検診が受けられ、予約の電話も不要としている、など利便性が高いのではないかと。医師会に委託している事業なので、医師会のやる気もあるの

だと思う。

Q. 健診受診率が高いということは、個人医院にも行かれるとは思いますが、やはり市立病院の担う件数が多くなるかと思う。そのあたりはどうか。

A. 藤枝市では市立病院と医師会では比較的良好な関係であり、役割分担ができてい
るようである。定期的な会合や親睦等も行なわれている。歴史的にも、旧志太郡に
総合病院があり、昔から保健師の養成や健診に力を入れてきたという経緯がある。
一時は経営が厳しいときもあったが、10 年ほど前から、新しい市長や病院長が藤
枝の中心病院としてやっていかなければならないという理念の元で苦労しながら
改革を進めてきた。経営は楽ではないが、なんとか危機を乗り越え、地域医療指定
支援病院としての指定も成り立ったという状況。

2. 愛知県常滑市

●対応者：（議会）常滑市議会 川原 和敏議長
（執行部）常滑市病院事業副管理者
（議会事務局）

●場 所：常滑市民病院会議室

●市 勢

*市制施行 昭和 29 年 4 月 1 日

*人 口 （男）28,929 人（女）29,426 人＝合計 58,355 人（H28.3.31）

*世 帯 数 23,430 世帯

*面 積 55.89 km²

*産業分類就業者比率

【第 1 次産業】3.6% 【第 2 次産業】31.0%

【第 3 次産業、他】65.4%

●特 徴：愛知県知多半島の西海岸に位置し、面積 55.90 平方キロメートル（平成 28
年 10 月 1 日現在）、東西 6 キロメートル、南北 15 キロメートル、海岸線 19.8 キロ
メートルと南北に細長い。北に知多市、東に阿久比町、半田市、武豊町、南に美浜町
に隣接している。平安時代末期ころからの「古常滑」と呼ばれる焼き物の産地として
知られ、瀬戸、信楽、越前、丹波、備前と並び、日本六古窯のひとつとされ、中でも
最も古く最大の規模とされており、窯業は現在も主産業になっている。窯業のほかに
は繊維、工業、機械金属工業、醸造業などがある。農業は大規模な耕地整備が進めら
れ、野菜、果物などの栽培が盛ん。漁業も盛んで、魚の宝庫といわれる伊勢湾から多
種類の魚が獲れ、のり養殖も行われている。

●議会の状況

*議員定数（条例定数 18 人、現員 16 人）

*会派構成：創造未来（8人）、翔政会（5人）、公明党議員団（1人）、日本共産党議員団（1人）、新風クラブ（1人）

*会議の開催状況

- ・定例会：（3・6・9・12月）→本会議日数：22日／年（H28年度実績）
- ・臨時会：2日／年（H28年度実績）

*議決結果：137件（H28年度実績）

*常任委員会

総務委員会（6人）、文教厚生委員会（6人）、経済建設委員会（6人）、予算委員会（16人）

*特別委員会

公共施設あり方検討特別委員会（14人）

*その他

広報公聴委員会（7人）

*事務局職員数：事務局長以下 5人（定数7人）

●概要：（資料別紙）

常滑市民病院建設事業について

- ①概要と特徴…常滑市唯一の入院施設をもつ総合病院。H27年5月新病院開院。
年間1万件の救急患者を受け入れる二次救急病院。特定感染症指定医療機関。
病床数267床、診療科目24。
一日平均入院患者数：237人（H28年度）
一日平均外来患者数：613人（H28年度）
延床面積22,000㎡、地上7階建。保健センター併設。
充実したリハビリフロア（回復期リハビリ病棟41床、365日運営）

②新病院建設への道のり

2度にわたる新病院建設の遅延を経て、H22年10月、片岡常滑市長が「新病院建設」を宣言。「H27年5月に新病院を開設する」
『新常滑市民病院100人会議』…市民と病院との対話の場
対話を重ねていくうちに、お互いを理解し、病院を応援する声になった。
『コミュニケーション日本一の病院』を基本理念に。

○主な経営改善の取り組み

→病院目標設定、材料費の削減、委託料見直し、事務局のプロパー化、地方公営企業法全部適用、365日リハビリ開始、550プロジェクト開始、医師診療手当の見直し、回復期リハビリ病棟の開始

③経営状況



●質疑

- Q. 病院の経営者や事務局長等を市職員ではなく、民間から採用する形態についての考えを聞かせていただきたい。
- A. 民間と市のいいところ取りをしたら良いのではないかと思います。病院は独立しているように見えても、人事や経理など、市のルールに従って動いている。そうすると市職員でよくわかっている人、連携の取りやすい人が必要となる。ただ 2～3 年で異動してもらっては困るので、せめて 3～5 年在籍し一仕事してからにしてほしいとは要望している。プロパー職員と市職員のノウハウを集めてやっていくのがいいのではないかと。
- Q. 新病院になり職員の意識はどのように変わったか。収益増に繋がっているということは、職員の教育が大変重要になると思うが。
- A. 何かがあつてがらつと変わったというよりは、段々と変わっていったと思う。病院はできるんだ、市長が約束したということから皆が向かっていき、意識が変わり始めた。100 人会議などを経て、新病院ができた頃にはもう準備はできていた。良い病院とはどういう病院なのか皆で考えよう、そのためにはどうしたらいいだろうということから始めた。新病院ができればよくなるとか、人が増えるとか、それは間違いである。
- Q. 経営の黒字化のポイントは。また医師診療手当の見直しなどはそう簡単にできるものではないと思うが、なぜできたのか。
- A. 病院の経営状況について、病院職員に対して説明する機会が少なかったことが反省としてあった為、目標を設けたらどうなるのか、その目標は他病院と比較してどうなのか、相対的にどうなのか等を説明した。そして最後は医師がどう変わるか、ということになる。全員は無理だが、医師のうち 3 割が変われば、4 割の医師はついてくる。トップの 3 割が変わってくれ、元々意識の高い医師を含め 4 割が引っ張ってくれた。医師診療手当の見直しは本当に良いのか疑問ではあったが、一つの仕組みを皆で提示し、医師の頑張りを数字に表せるようにした。これを始めると辞め

てしまう医師がいるのではないかと心配したが今のところない。仕組みとして完全なものはないので、また改善していこうとは思う。一つの起動力にはなった。

Q. 職員の給与カットの状況は。

A. H23～27年度の5年間で、一般職（事務職、本庁の事務職や消防、保育士等の職員）の給与を平均で15%カットした。医療職については適用せず、モチベーションを高めたままで建設に向かっていった。常滑市の財政的にも厳しかったので、市財政として10%、病院の繰出分として5%カットを行った。常滑市の財政面の改善と市民病院建設について職員全体で考えたということ。

Q. 一般会計からの繰出しはどのくらいか。

A. 基準内繰入で、年間8億円ほどである。昔は基準外繰入もあったが、今は基準内に収まっている。

3. 岐阜県可児市

●対応者：（議会）可児市議会 板津博之副議長
（文化創造センター a l a）衛紀生館長
（議会事務局）事務局長

●場 所：文化創造センター a l a

●市 勢

*市制施行 昭和 57 年 4 月 1 日

*人 口 （男）50,155 人（女）51,142 人＝合計 101,297 人（H29.4.1）

*世 帯 数 41,085 世帯

*面 積 87.57 km²

*産業分類就業者比率

【第1次産業】1.4% 【第2次産業】37.3%

【第3次産業、他】64.8%

●特 徴：岐阜県の中南部に位置し、古くから飛騨路および木曽路への重要な結節点となっている。岐阜市および名古屋市からともに 30 k m の距離にあり、J R 太多線、名鉄広見線で、ともに概ね 1 時間の位置にある。昭和 40 年代後半から名古屋圏のベッドタウンとして丘陵地を中心に民間開発による大規模な住宅団地の建設が相次ぎ、急速に人口が増加した。

平成 17 年 5 月 1 日には飛び地である兼山町と合併し人口 10 万人を超え、可茂地域の拠点都市として発展している。

●議会の状況

*議員定数（条例定数 22 人、現員 22 人）

*会派構成：誠懇会（10 人）、自由民主クラブ（2 人）、可児市議会公明党（2 人）、

日本共産党可児市議員団（2人）、真政会（4人）、市民の声（2人）

＊当選回数：1回～8回

＊会議の開催状況

- ・定例会：（3・6・9・12月）→本会議日数：16日／年（H28年実績）
- ・臨時会：1日／年（H28年実績）
- ・常任委員会：35日／年（H28年実績）
- ・特別委員会：27日／年（H28年実績）

＊議決結果：114件（H28年実績）

＊常任委員会

総務企画委員会（8人）、建設市民委員会（7人）、教育福祉委員会（7人）、
予算決算委員会（20人）

＊特別委員会

議会広報特別委員会（8人）、議会改革特別委員会（10人）、議員定数報酬検討
特別委員会（7人）

＊事務局職員数：事務局長以下 6人（定数8人）

●概要：（資料別紙）

文化創造センター a l a について

- ・来館者数 476,000 人（2014 年度統計）→市民 1 人あたり年 4.7 回
- ・客席稼働率：87.8%（2014 年度統計）
- ・観客数 52,188（2014 年度統計）前年比 123%、2007 年度より 368%増
- ・収支比率 2009 年以降 130～140%で推移

- ・地域の公共文化施設は、「政策目的」でなく「政策手段」
- ・劇場は「興行師」ではない

地域社会とコミットし、すべての市民を視野に入れたサービスを提供する
「社会機関」である。「経験価値」「思い出」「行動の変化」「生き方」を提供する。

- ・幸福追求権・自己実現の権利→積極的な福祉＝文化政策
- ・積極的な福祉政策としての文化行政

事後的な福祉政策から、社会的予防政策としての福祉政策へ。

- ・身体的、精神的、社会的障害 を要因とする生活困難によって社会的孤立に瀕している人々を、文化芸術によりケアし、個々のポテンシャルを新しい社会構築に反映させる。

→「自己肯定感」「生きる意欲」の醸成→他者の発見

劇場から一番遠くにいる人々を孤立させない。社会に参加させ、包み込む。



●質疑

Q. 安来市のアルテピアは指定管理による運営となった。直営と指定管理とではどちらが良いと思われるか。

A. 公益法人、財団を作って行なうのが一番良いと思う。行政課題と、劇場が担う社会の課題が一体化できるとよい。当センターも役所と連携しながら運営している。役所が国の補助金を取り、劇場に事業として委託してもらい、という形。民間に任せるのも良いが、民間は利潤を最大化しなければならない。そしてどこかの街の本社に利益を送らなければならない。例えば1千万円の利益が出れば、本来は安来市民のために使わなくてはならない。安来でも雇用が生まれるとは言うものの、大体がパートやアルバイト職員になる。それでは駄目。行政は業者に対して出す仕様書の中に、お金がどうかかるのかも知らないで、あれもこれも書いてしまう。一番しわ寄せが来るのは、当然人件費。では人件費は圧縮して物件費、つまりパート職員にしよう、となる。3年や4年でクビになるようなところに、若くて優秀な人材が来るわけがない。

劇場は、大事な経営資源の一つはそこで働く人間だと思う。経年で、市民との関係づくりができるため。a 1 aのように常勤雇用で、経営資源として、生き生きとそこで働く人間と市民が交流し、安心感を与えるようなことが一番大切である。指定管理料が安いとはいっても、安いにはそれなりの理由があり、安来市には何も起こらない。サービス業の業態と経営がどういうことなのか、きちんとわかっていればいいが。仕様書にはあれもこれもやれということは書くが、雇用形態については書かない。指定管理者が悪いのではなく、自治体職員の意識の問題ではないかと思う。劇場で働く人間が、そこで働くことに誇りを持てるような、生き生きと働けるような経営をしてはどうか。経済という外部性ということになるが、劇場を使って、外に外に発信できるようになれば、中国地方でそのような劇場ができればおそらくブランド力が一気に上がると思う。安来市のシティプロモーションになる。

チケット料金は安く、名古屋が当市の1.5倍、東京は2倍。1万円で500人呼べ

るのであれば、5,000 円で 1,000 人、2,500 円で 2,000 人集めるのが、公立施設の使命である。

Q. 当日券を安く売ることへの市民の反応は。

A. 始めは「当日券がなぜ安い？」という反応であり、クレームもあった。しかし当日券が高いのは日本ぐらいのもの。当日券のほうが高いのに席は悪いのでは経済的合理性が全くない。今は当日の 0 時にインターネットを通じて半額等で購入する人が結構多い。良い席で楽しみたいという人は、前売券で購入される。

Q. 費用はどこが持つのか。

A. a l a で持つことになる。チケット料を安く抑えるために、満員になっても赤字という場合もある。ただ貸し館の料金が約 3 千万円ある。それに加えてブランド力を持つと、補助金・助成金が入ってくる。6 千万円くらい。施設を建てることを目的としない。その先が重要である。ブランド力が高くなると助成金の他にも企業協賛が取れるようになり、資金調達環境が劇的に良くなる。

< 考 察 >

梅林守委員長

○「健康予防日本一ふじえだプロジェクト」の取り組みについて

藤枝市は「選ばれるまちふじえだ」を目指し、若い世代を中心に定住人口増加中であり、市民の暮らしに大切な健康、教育、環境、危機管理（交通安全）の 4K 政策を重点戦略に掲げ健康予防日本一ふじえだプロジェクトに取り組まれています。市民、事業者、行政が一体となって発症予防、重症化予防、地域健康医療、豊かなライフスタイル、健康寿命の延伸、生活習慣病など、健康に対する推進体制を取られています。

健康マイレージチャレンジシートは、自分で目標を定め、コツコツとラジオ体操、歩き食事、歯磨き、体重測定などします。別に検診を受けたイベントに参加したなど、ボーナスポイントを受け取ることができます。2 週間以上実践して 100 ポイント以上貯まったら申請します。保健企画課から、「ふじのくに健康いきいきカード」が交付され、その協力店で提示すると特典が受けられる、との説明がありました。市民なら誰でも気軽に参加できる様な工夫がされ、運動、食事、社会参加が一体となった事業であり、安来市でも取り組んではどうかと感じました。

○健（検）診受診率向上の取り組みについて

藤枝市は特定健康診査受診率が 49.6%（全国平均 35.4%）で静岡県内人口 10 万人以上の部で第 1 位、また内臓脂肪症候群（メタボ）が少ない、がん検診受診率も高い！など藤枝市民の健康関心度が高い、その理由は保健委員連絡協議会の組織があるために各

支部あげて取り組まれているそうです。市内 12 支部 1,000 人体制で活動（60～80 世帯に女性委員を一人選ぶ）して、お世話をする委員が身近にいて活動すればおのずと健診受診率が高まってくると思われ、その取り組みに感心しました。

○常滑市民病院建設事業について

旧常滑市民病院は昭和 34 年に開設された。築 56 年の施設で、老朽化し、医師不足等により、経営不振（赤字経営）が続いた。平成 19 年 12 月に就任された片岡市長が平成 22 年 10 月に「平成 27 年 5 月に新病院を開設する」との宣言をされた。キーマンに総務省出身の山田氏を副市長として迎え、みんなで創ろう新常滑市民病院 100 人会議を発足した。「地域や市民にとって本当に必要な病院づくり」を目標に日曜日の午後の会議で、月 1 回のペースで計 5 回開催された。その結果、市民から病院に対する不満、病院側の思い、看護師からの意見等が出た。対話を重ねていくうちに、市民と病院がお互いを理解する結果となった。ある委員の一言で、基本理念が、「コミュニケーション日本一の病院を実現する」となったとの説明があった。

安来市立病院の新改革プランにおいても、施設の老朽化対策について、施設更新の選択肢において、安来市全体の医療提供体制を考えるなかで、安来市立病院に必要とされる医療機能及び規模を考慮し、耐震化または建て替えを必要とされている。建て替えの決断は当然市長にある。常滑市のような、市民、医療、行政を巻き込んだ 100 人会議を設置することが有効だと感じました。

また、説明の中で病院建設において、一般職 15%給与カットがなされたそうです。

◎医療診療手当が一律配分から傾斜配分に見直された。

◎365 日リハビリができること。

◎市民向け医療公開で、手術場の公開。

素晴らしい決断と実行に感心しました。

○可児市文化創造センター a l a（翼）について

衛紀生氏より、センターを興行場として造ったら失敗する。自分たちは「興行師」ではなく、社会の貢献人である。一部の愛好者のための施設ではない。教育のための施設利用や、社会的・精神的障がい要因とする、生活困難者を文化芸術によってケアしていくなど様々な講義、説明を受けました。

衛館長は 2007 年から a l a の館長に就任され、硬直化した公立劇場の経営をどのような仕組みで変えていくのか考えられ、総務大臣賞受賞、文化庁特別支援施設として採択されています。2012 年度で来館者数は 438,000 人、就任時との比較で来館者 1.7 倍、観客者数 3.2 倍となっています。就任当初に構想された「社会貢献型劇場経営」が実を

結んだと話されました。a l a の経営はそうした館長の職員指導があり、頼もしく思いました。

安来市文化ホール「アルテピア」の管理運営経営に大いに参考となりました。
チケットは、当日の0時に半額とすることについては、大変驚きました（完売するためのアイデアか）。

ホール見学で、舞台が広がったです。通路も広くとってありました。

客席数大ホール 1,019、小ホール 311。

佐々木厚子副委員長

○藤枝市

藤枝市は平成 25 年に『健康寿命をのばそう！アワード』の自治体部門で「健康・予防日本一」ふじえだプロジェクト」が厚生労働省健康局長優良賞を受賞され、その後、様々な推進体制が確立され、多くのプロジェクトが立ち上がりました。

一つ一つのプロジェクトを、市民の皆さまが自分に興味のあることから気軽に始められるところが多く、の皆さまに受け入れられているのだと感じました。それらが、市民の健康関心度を高めることとなり、特定健診の受診率向上につながり、がん検診受診率も高く、メタボ率を下げるといった様々な成果を生み出しています。

とても素晴らしい取り組みだと思うと同時に担当課の意気込みを感じました。

○常滑市

老朽化した以前の病院では経営不振、医師不足、病院職員のモチベーション低下など、低迷する要因が色々あったようです。

しかし、2 年前に新築移転した新病院では『私たちは、小さいからこそできる「コミュニケーション日本一の病院」を実現します』との言葉どおり、病院という概念があまりなく温かな気持ちになるような内装、絵画、スタッフの皆さんの挨拶等、院内は様々な工夫と配慮がなされ、市民の皆さまに愛される市民病院に見事よみがえりました。

当然、ここまでくる道のりは並大抵のことではなかったと思いますが、「コミュニケーション日本一の病院」はスタッフにとっても働きやすい病院であるともいわれていましたが、来院した患者がこの病院に来てよかったと思えるのはやはりスタッフの皆さんがこの病院で働くことに自信と誇りを持ち、病院改革に取り組み、患者一人一人を大切にし、医療に従事されてきたからだと思います。全ては人から始まるのだと痛感しました。

安来市立病院が今後どのようなようになっていくのか？今後も色々提案していきたいと思っています。

○可児市

衛館長はうわさ通りの方でした。

そもそも市の税金で建てた文化創造センターを単なる興行収入を得るためのものにしてはいけない！との言葉から始まったお話。アーラは積極的な福祉政策としての劇場経営にしなければならない、地域の公共文化施設は「政策目的」ではなく「政策手段」である。「どのようなまちをつくるのか」という政策目的のための政策手段でなければならない。等々今まであまり聞いたことのないようなお話を伺いました。

特に感動したのは、「私のあしながおじさんプロジェクト」で、地元の企業や団体から寄付を募り、その寄付金でオーケストラや寄席、ピアノリサイタルを開催し、それに、可児市内の中高生を一年に2回まで無料のチケットをプレゼントするという企画です。このアーラに足を運び、音楽、文化に触れることで自分を変えていけたという中高生も多いと伺い、とても素晴らしい斬新的な企画に感銘を受けました。

また、アーラ全体の稼働率もかなり高いと伺い、市民の皆さまがとても利用されている施設でした。

安来市のアルテピアも市民の皆さまから愛され、多くの皆さまが気軽に足を運んでいけるような総合文化ホールになってほしいと思います。

中島隆夫委員

○藤枝市 健（検）診受診率向上について

市の重点戦略について暮らしの基本「4K」政策を取り入れ、これにより市民が幸せな健康生活を少しでも長く続けられるまちを目指されていた。（4Kとは健康、教育、環境、危機管理）

本市についての取り組み方の参考になるものと感じました。

○常滑市 市民病院建設について

税金を使うなら市民の声を聴くべきとのことから、市民との対話の場として100人会議を発足し取り組みされた。メンバーは市民より（公募等により）91人、行政・医師・看護師など21人により月に1回会議の中で市民より、古い、汚い、暗い、待ち時間が長い、など不満が出た。その中で委員の一人が「コミュニケーション日本一の病院を目指そう」との発言があり、そこで病院の基本理念、基本方針に組み込まれた。病院の入り口の目指す柱にはこの標語が書いたものが取り付けにあった。本市病院においても参考にしてはと思った。

○可児市文化創造センター a l a について

興行を目的な考えではダメとの話を伺いました。市民参加を取り入れたものにしていいといけません。アルテピアの活用について今後の検討と感じた。

石倉刻夷委員

○藤枝市

- ・市の重点戦略、暮らしの基本、4 K政策を「健康、教育、環境、危機管理」の頭文字でわかりやすく、健康・予防日本一のキャッチフレーズが情報発信されており（市長の方針）、視察も平成 28 年度 21 件と記録されていた。
- ・体制は、市民・事業者・行政が一体となつての推進であり、その効果は保健委員選任により底辺への拡大があると感じた。
- ・マイレージチャレンジシートが 4 Kをもじって作成されており、市民の方は身近に感じて、各部局でも成果を検証できるので、必死に取り組まれているのではと思われる。
- ・ポケットM a p はユニークで健康ウォーキングに貢献し、厚労省の優良賞を受賞されていた。
- ・半日ぐらいかけての勉強が必要と感じた。

○常滑市

- ・新築完成後 2 年を経過し、順調に運営がなされていた。「コミュニケーション日本一」の病院を目指す基本理念
- ・中部国際空港の玄関市として国内で 4 番目の特定感染症病床 2 床を持つ指定病院機関として位置づけられていた。
- ・保健センターの併設により、予防と医療の連携がスムーズであるとのこと。
- ・リハビリ病棟＝リハビリセンターは 365 日運営で、40 名を超えるスタッフ体制に驚いた。
- ・平成 22 年 10 月に市長が公約を掲げ選挙、平成 27 年 5 月に新病院を開設、事務局のプロパー化が大切であるとのこと。
- ・医師診療手当の見直しや病院ボランティアの誕生など、内外に改革の足跡が伺えた。

○可児市

- ・設置と運営状況、課題と将来構想について、常勤の衛紀生館長より資料に基づき熱く説明を受け、若干の意見交換後、施設の主要部分を見て回った。トータル稼働率 80%を超えており、市民が参画して十分利用されていると感じた。
- ・興行の為の施設の考えではなく、社会に大きく貢献する文化施設の考えを基本とすること。
- ・運営にかかわる委員には、福祉団体・教育関係者の代表等が加わるのが望ましい。
- ・市民（家族）は、思い出を共有し、コミュニケーションを共有することで、文化施設のコミュニティが確立できるとのこと。
- ・人間は不合理で動くもの。当日が値引きされた前売り券発売方法でも理解されるもの

である。
大変勉強になりました。

田淵秀喜委員

○藤枝市

＊健康寿命をのばそう！Awardの自治体部門受賞を契機にまちづくり政策の1丁目1番地を市民の「健康」づくりと位置づけ、取組み展開の重点戦略として「暮らしの基本4K政策」(健康)(教育)(環境)(危機管理)を掲げ、多数の市民参加と情報発信強化を図る中で“健康・予防日本一”ふじえだプロジェクトの取組みが展開されている。自治体を牽引する首長の方針が明確化され、職員がその実現を図るべく具体策をしっかりと立案し実行している。「暮らしの基本4K政策」(健康)(教育)(環境)(危機管理)等の取組み展開にあたっては、行政組織としては多くの部・課を跨ぐこととなり、安来市にみられるような縦割り行政の弊害による連携不備が危惧されるところであったが、ふじえだプロジェクトにおいては、市民・事業者・行政が一体となった推進体制が確立されており、参考とすべき点が多々あった。(以下特筆点)

・取組み1：守る健康(命を守る)

地域から1000人の保健委員(206町内の自治会長・町内会長は当職)が選出され、自治会組織(市民)を基盤とした取組みであり、市民の認知度、理解度が非常に高く、市の人口14.5万人中2万人が保健委員の経験者となっている。30年を超える歴史もあるが、市民一人ひとりが当たり前の取組みとして定着している点がベースとなっている。その成果として、「特定健康診査受診率」49.6%/35.4%(全国)、「メタボ率」は静岡県が全国2位の少なさで、その中でも11.5%/13%(静岡)とトップクラスの水準である。がん検診受診率も全国10万人以上の288市中、肺：11位、大腸：7位、乳：9位と高く、取組みによる市民の健康関心度の高さが成果として表れている。

・取組み2：創る健康(命を輝かせる)

全人口の30%近い無関心層に対する動議付として、「“楽しい”“お得”の切り口から→健康への展開」が“健康・予防日本一”ふじえだプロジェクトの取組みの最大の特徴である。健康をキーワードに、地域・産業を振興、定住促進に繋げる、ポリシームックス&シティ・プロモーションであり、地方自治体が抱える最大かつ喫緊の課題である人口対策の手法として参考になる。

★プロジェクト1：歩いて健康「日本全国バーチャルの旅」

- ・継続したウォーキングを支援

★プロジェクト2：ふじえだ健康スポット20選

- ・地域の宝を健康づくりに活用

★プロジェクト3：ふじえだ健康マイレージ

- ・日々の健康行動の実践と定着→ポイントを貯める→健康マイレージカード発行

→協力店舗等で使う、サービスを受ける(例：寿司屋で旬の寿司1皿)

世代に応じたアプローチとツールにより、「個人で楽しむ健康」「みんなで楽しむ健康」を多数のメニューの中から選択して取り組める仕組み、加えてお得感も味わえ、心身ともに健康増進に繋がる参考点多き内容であった。

○常滑市

*安来市において市立病院の在り方については喫緊の課題である。常滑市民病院においても昭和34年開業以来施設の老朽化、赤字経営、医師不足、職員のモチベーション低下、2度にわたる新病院建設の遅延等々、自治体病院の抱える同様の課題を乗り越え平成27年5月に新病院建設スタートし、経営改善策を含む多種多様な取り組みが展開され、短期間で劇的な成果が出つつある。その内容を伺う中で病院の改革は市民を巻き込んだ人の改革であり、「あつてあたりまえ」から「あつて良かった」の評価を得られる病院へ根底から変革させることが重要と思う。

この病院の基本理念・基本方針は「コミュニケーション日本一の病院」①顧客コミュニケーション②スタッフ間コミュニケーション③地域連携コミュニケーションとし、地域の皆さんに感謝して「病院祭」、「健康ひろめ隊」による出張健康チェック、市民向け公開講座等々取り組み展開されている。また、病院スタッフが働きやすい病院づくりが病院経営の根幹であり、職員・スタッフの明るい表情が印象的。

特徴点では、病院ボランティアの活動である。登録者数150名、50～70歳代が活躍中であり、その活動内容は正面玄関での患者さんの送迎、車いすの患者さんの介助、自動受付機や清算機の使い方の案内、病院周りの草取り・植栽管理、入院患者さん向けレクリエーション(理髪・お話会・笑いヨガ・折り紙教室など)、コンサート・交流会などのイベント企画等々、従来であれば有料で行っているものや病院職員が実施するものを行っており、まさに、自分たちの病院は自分たちであつて良かったと自負できる病院へ作り変えようとする意識が感じられた。

経営改善においても、医師診療手当の見直しにより一律配分から傾斜配分とし、がんばった医師が報われる制度(成果配分制)に変え、評価項目に対する成果により2か月後の給与に反映することにより医師のモチベーション向上、医師確保等々成果が出ている。その他看護師等病院スタッフ、事務職員等の給与は赤字経営から脱却するためにカットすることはなく、市長他特別職を含む行政一般職をカットし直接現場のやる気を倍増させる手段をとっている。自分たちが頑張つて改善すれば一般職員のカットもなくなるとの一体感のある取り組みが功を奏しており、安来市における市立病院改革の参考となる。

○可児市

安来市においては、いよいよ9月には総合文化ホールが竣工を迎える。今後において

は、まちづくりの拠点施設としての活用、健全かつ有効的な管理運営が求められる。

この施設は衛館長という強力な人材により単なる劇場興業のみならず、地域の芸術振興の拠点施設として、市民を巻き込んだアウトリーチ(出張)活動やワークショップ等、「地域総参加型の地域社会をつくる」をコンセプトとした施設機能を有している。具体的な特徴点では、地元高校でのいじめ防止に向けコミュニティーアートワーカーを活用し、ダンス体験、ワークショップ、演劇づくり等々多数企画・実施、また、認知障害や発達障害等の方々へのみのコンサートで良いものを視聴しての感動を寄与する取組みなど、社会的投資効果をしっかりと生み出す活用が行われている。

ただ単に興行場を作る考えでは文化ホール運営は失敗する。地域社会の活性化にどう活用するのか、そのポイントは小・中・高を中心とする若年層の参加・活用と高齢者コミュニティとしての活用が不可欠である。安来市総合文化ホール(アルテピア)は、指定管理者による運営がスタートするが、ただ単に興業だけに向かうのであれば、まちづくり・活性化拠点施設としての機能は発揮できない。行政としてのかかわり、設置目的をしっかりと再整理し、市民総参加型の施設として活用できる仕組みを早期に確立することが重要と強く感じるものである。

原田貴与子委員

○藤枝市

- ・藤枝市における健康診断の受診率は、平成 27 年度 49.6%で、人口 10 万人以上の市で全国 1 位。平成 26 年度のがん検診は、すべてで受診率が全国平均より高い。一方、75 歳以上の市民の年間一人当たりの医療費は、74 万円で全国平均の 93 万円より 19 万円少ない。健康志向が高く、元気なお年寄りが多いと市はのべています。
- ・安来市における国保事業は、医療費の増加に伴う国保税の引き上げで市民負担増、一方、特定健診受診率はなかなか上がらないという課題を抱えています。
- ・このような中で、視察から学んだことは、一つは、藤枝市の重点戦略の 4 K 政策です。施策を明確化し、市民とともに行う部分である啓発を、丁寧に企画として魅力あるものに行っていることです。
- ・4 K とは、暮らしの基本として健康、教育、環境、危機管理を重点政策として定め、それを一本化したプロジェクトとして“健康・予防日本一” ふじえだ推進体制があります。その目的は、市民が幸せな健康生活を少しでも長く続けられるまちとされています。
- ・健康マイレージチャレンジシートで健康につながる目標設定、ウォーキングの魅力ある目標設定やお得の付与など、本来自分のためになる健康の上にさらにやる気を引き出してくれる規格であります。保健委員さんの存在など組織体制も整えられており、それが、検診率向上や、健康につながっていくのではないかと思います。
- ・安来市においては、現に市民の公民館活動にみられるように、健康、運動、介護予防

活動への関心は高くなっていると思うので、さらにそれを広げるために、健康づくりへの市民の関心を高める魅力ある施策づくりと、健康会議との連携、また、保健指導、実践に今後力を入れるべきであると思います。病気予防、健診（検診）率を上げていくことに力を入れるべきだと思います。

○常滑市

- ・低迷した新病院建設事業の中で、施設の老朽化、経営不振、医師不足、病院職員のモチベーションの低下がありました。という報告を聞いてまさに、安来市立病院の現状と重なるのではないかと思いました。
- ・それを打開し、新病院建設、経営改善がなされて現在、「コミュニケーション日本一の病院をめざしておられる病院見学をして、患者にやさしい病院、スタッフのことがしっかり考えられた病院だと感じました。
- ・安来市立病院については、方針決定にだれがどのように分析し、責任を持っていくのか、道筋を明らかにしていくことが重要だと思いました。病院経営に詳しい専門家の助言、市民の意向など多方面からの意見が反映されることを望みます。
- ・公立病院が持つ役割が発揮できるそのような病院は地域に必要であると思いますが、あるべき姿を私たちが研究し求めていかねばならない、そういう議論が必要だと思います。

○可児市

- ・文化芸術にこれだけのお金をかけていいのかと思わせる素晴らしい施設でした。しかし、ホール的大小ではなく、いかなる発信をその施設を通して行うかが大切だと感じました。文化ホールがいかにして市民の幸せのために役立つかを深くとらえなければ、安来市総合文化ホールの存在価値が薄れてしまうと思いました。
- ・可児市は、積極的な福祉政策としての劇場経営を掲げ、可児市文化創造センターの仕事を「事業定義」しています。理念を掲げ、目標を持ち、目的意識的に劇場経営の中で、健全な地域社会を作ることを目的としています。
- ・安来市においてもいわゆる単なる貸し館や、興行師ではない、市民のためにある施設として、文化芸術の拠点、地域発展、人が生きる意欲がわく場であってほしいと思いました。そのためには、文化ホールの運営に市民が参加していくことも必要でありますので、広く市民の方に関心を持っていただくためにも、市民自身が文化ホールを生かしていくという学びも必要ではないかと思いました。
- ・a l a（アーラ）の館長さんには学ぶべき点が多くありました。安来市総合文化ホールの館長は安来市民が望む方になっていただき、市と市民のために尽くす人的人選が重要だと思いました。

作野幸憲委員

○藤枝市

まず特定健診受診率の高さ（2015年 49.6%）、メタボ率の低さ（2014年 11.5%）、がん検診率の高さ（2014年肺がん 43.0%、大腸がん 44.5%、子宮がん 56.5%、乳がん 54.9%）にびっくり。その要因は、30年以上続く自治会組織を基盤とした1000人体制の保健委員を出して取り組んだ成果とのこと。またバスやタクシーで迎えに行ったり、特定健診やがん検診をセットにした取り組みが成果として表れてもいると思った。そして健康に無関心な層を楽しみ、お得の切り口から健康へ結びつける創る健康「健康・予防日本一プロジェクト」は、3つのプロジェクトを柱に展開しておられ、特に「ふじえだ健康マイレージ」は、webシステムやスマホアプリを開発するなど30~50代の働き盛り世代をターゲットに進めておられ、健康の「見える化」やデータ活用など今後の展開も期待できる政策でした。

○常滑市

旧常滑市民病院は、昭和34年に開院したが、施設の老朽化や赤字経営、医師不足などによって存続の危機に陥ったが、市長の熱い思いで建設することになったとのこと。そこでキーマンとして登用したのが自治省出身のキャリア官僚。税金を使って新病院建設をするためには市民の声を聴くべきと100人会議を発足させ、喧々諤々議論したのち、「コミュニケーション日本一」を基本理念とし、平成27年5月の開院をめざし、様々な取り組みをされた。特に「病院の目標設定」を明確にすることと「事務局のプロパー化」がもたらした意義は大きいと感じた。そのことによって計画段階からモチベーションが上がり、今までの病院になかった取り組みできたと思う。また財政が厳しかったので、市職員全体で平均15%の給与カットをしてまでも実施されたことは、市の本気度・やる気が市民にも見えたと思う。安来市も「市立病院をどうするか」は、喫緊の課題。常滑市のやり方は非常に参考になると思う。

○可児市

まずは説明をしてくださった衛 紀生館長の熱意と考えに圧倒された。まず劇場は①良いものをやること②孤立している者のためにする この2つの理念を持ってやらないと税金を使ってやる劇場は成り立っていないことを強調された。とにかく劇場は、一部の愛好家のものではダメで、地域社会のためになっていないとうまくいかないことも。またそこで働く人間こそが大事であることも強調された。今年9月から安来市も総合文化ホール「アルテピア」が開館するが、衛館長のような考えがないと「将来運営がうまくいかないのでは？」と思った。しっかりとこのことを頭に入れ、アルテピアの運営を当面はしっかりチェックしながら、見守りたい。

以上